CIAの彼女

ツム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「名探偵コナン」の世界に転生していた古雅麗華≪こが　れいか≫。

転生したのら、思う存分この世界を楽しむか!!

能天気な彼女がじわりじわりと、主人公たちと絡んで振り回していく話しです。

目　次

ＣＩＡの彼女 ―― 1
黒歴史なんて消えてくれない ―― 9
彼の弱さ ―― 15
彼女の協力者 ―― 20
すでに手は組んでいる ―― 24
漆黒の追跡者 ―― 27
漆黒の追跡者　Ⅱ ―― 32
漆黒の追跡者Ⅲ（完結） ―― 36
休息の一時 ―― 39
亡霊の逢引 ―― 43
それぞれの想い ―― 48
ミステリートレイン ―― 52
腹の探り合い ―― 57

ＣＩＡの彼女

―アメリカ中央情報局・ＣＩＡ―

不気味なほど、静かな闇にカタカタとキーボードを打つが響く。

パソコンの画面越しに映されていたのは

『シルバーブレッド・・』

№1

「ハァイ、有希子。貴女のボーイ、大変な事になってるわね。」

「その声って、もしかして、麗ちゃんかしらぁ？

そうなのよ、新ちゃんったら、危ない事件に首突っ込んじゃってねぇ。」

「やっぱり？好奇心旺盛なのはきっと優作似なのね。」

「まあ、仕方ないわよ。それで久し振りに電話がかかってきたかと思ったら、

この話って事は、この件について一枚噛んでるって思っても良いのかしら？」

「あら、有希子にしては鋭いじゃない？優作の影響かしら。」

「もう、これくらい分かるわよ！で、話を逸らさないで頂戴！」

「あら、ごめんなさい。久しぶりに上司から休暇だって電話で告げられてね。何事だって思ったら、組織についての仕事でね、それに調べていくとまさか有希子のボーイが巻き込まれてるし。びっくりしたわよ」

「そうだったのね。で、日本に来て私に電話したってことね。」

「それにあたし自身、ボーイと同じ目に合ってるしね。」

「っ！ちょっと待って、麗ちゃんもしかして薬を・・・「その事についてはまた後で話すわ。それと、ここからが本題なんだけど、貴女の家に居候させてくれないかしら？」・・・

その口ぶりだと、優作には了承済みなのね。・・・分かったわ丁度私も日本に行かなきゃ行けないし、その時にはきちんと説明してもらうからね！」

「オーケー、有希子。それじゃ近いうちに貴女の家で逢いましょう。

Ｇｏｏｄ―ｂｙｅ」
スマホから耳を離して、これから始まる長期戦に無意識に口角が上がってしまう。
この世界に生れて、３７年経った。
そう、私は元々この世界の住人ではない、簡単に言えばトリップしてしまった。
信じがたい話でも、生きていくしかないと諦めは付いていた。
唯一の救いは前の世界と同じ職業に就いたこと・名前・そして「名探偵コナン」の知識を知っている位。
まあ、ＣＩＡは暇なのかなんて質問は愚問だ。
まあ、想定外は二つ。
一つは４年前、赤井秀一に出逢ってしまった事。
そして、一夜を共に明けてしまった事。
二つ目は、黒の組織に目を付けられて、あの毒薬を飲まされてしまったという事。
古雅　麗華　３７歳、現在２０歳。
一生の不覚である。
それでも運が良い事に組織側では死亡扱いされているし、職場の上司は把握済みだ。
これでも、一応、情報分析管理担当官の長を務めている身なんだけどなあ。
まあ、本当は局内で働く仕事なんだけれど、あたしの仕事はそれだけでは終わってくれず、
諜報捜査とまでは行かないけれど、それに近い仕事しているためにあまり局内には身を置いてはいない。
それでも信頼している部下たちには直々連絡は取っている方だから、心配はされるけど
文句は言われないから自由に活動させて貰っている。
それもこれもあたしの上司がよく理解している人だからこそあたしの力が発揮される訳だから感謝している。
だが、しかしこの前あたしの後輩、水無怜奈の身に危険が起きたと

知った。
あたしだけがなら、まだしも彼女までこんな危険な目に合うのは御免である。
それから、運よく上司が無期限の休暇と言う名の日本に行って組織の調査を頼むと
任された。
そして、現在、工藤家の目の前にあたしはいる。
ああ、もしかしたら沖矢君が居るかもしれないな・・。
・・・それもそれで面白そうだ。
なんて能天気に考えているあたしは本当にＣＩＡだろうかと自分自身疑いたくなる。
ピンポーン
・・・ガチャ
「はーい、・・・お姉さん、だあれ？」
・・・・まさかまさかのボーイご本人が登場だ。
「あら、ボーイ、見ないうちに随分と幼くなったわね。」
「・・・オメ―、誰だ？」
おっと、警戒モードに入ってしまった。
子供の声とは思えない低い声でうなる。
「まあ、ボーイに会ったのはもう、１０年以上前の事になるしねえ。
それに組織の事について頭がいっぱいってところかしら？
・・工藤優作の幼馴染であり、工藤有希子の親友である古雅麗華って言えば
ボーイも思い出してくれるかしら？」
そう言い終えると、ハッとしてボーイが目を見開いて見つめてくる。
「思い出した！母さんと一緒に弄り倒した麗華さんか!!
んでも、なんで、麗華さんが此処に・・・」
「詳しい事は中に入ってからで良いかしら？中に居る『沖矢君』も気になってる様子だし？」
「!!」

「ね?大丈夫、あたしはボーイ達の味方よ」
ボーイには酷い言われ様だったが仕方ない。
ニヤリと笑うと変わってねえなあ、その笑い方と言われてしまった。
「おや、その方は・・・?「あら、そんな胡散臭い演技しなくたって良いのよ?赤井君」・・」
「麗華さん、初対面なんだからあんまり弄り倒さないでよ・・・」
「ごめんねえ、ボーイ。テンション上がっちゃって」
ハハハ・・・乾いた笑いをよそに鋭い目線でこちらを観察しているのは、昔一夜を共にしてしまった、ＦＢＩの赤井秀一であり、死亡を偽装してこの家に居候する事になった
沖矢昴。
「それで、どうして彼女はこちらの事情を把握しているんだ?」
「そうだよ、麗華さん説明してくれよ」
「そうねえ、あたしの可愛い後輩の本堂瑛海と同じって言ったら大体把握できるかしら?」
「!!」
「その反応は知っているみたいね。
まあ、彼女が組織でちょいちょい危ないっていう噂を聞いてね上司が休暇がてらに
日本で調査してこいって言われたのよ。でもホテル暮らしもマンション契約もしなくちゃいけないでしょう?めんどくさいから有希子と優作に無理言って居候させてもらおうと思って此処に来たのよ。」
「まじかよ・・・。麗華さんって昔から掴み所ないって言うか、一般人じゃないっていう感じはしたけど、まさかＣＩＡだったとはな・・・。
ん・・・?でもよ、麗華さんって母さんと同い年じゃ・・?」
「ああ、あたしも組織の連中に目を付けられていてね、薬を飲まされたのよ」
「はあ?!」
「・・・・・」

一人は思いっきり叫んで、一人は言葉を失って・・。
よく生きてたなこの人・みたいな目で見られてるんだけどそれ、貴方達に思われたくないわよ。なんて言葉を呑み込んで、話を進める。
「実年齢３７歳。今の姿はそうねえ、二十歳くらいかしら?」
「そんな悠長に話して大丈夫なのかよ!・麗華さん!!」
「・・・毒薬の効果は人それぞれなのか・・・」
おい、赤井、今それ言う事か。
「って言ってもねえ、組織の中では死亡扱いされてるし、シャロンにも融通利かせてもらってるから大丈夫よ。それに二度目の二十代なんて、楽しまなきゃ損よ。」
「!!!」
「麗華さん、シャロンって、ベルモットか?!」
「そこの説明を詳しく聞かせてもらいたい」
「簡単よ～、有希子だってシャロンの親友よ?
なら、あたしだってシャロンとの面識なんてあるでしょう?
それに、シャロンにとってあたしはボーイと同じでお気に入りらしくてね・・。
今でもたまに連絡を取り合ったりする仲よ」
「おいおい、それって危険じゃねえのか?」
「俺達が追い求めていた物がこんなに間近で見つかるとは・・・」
「あら、そんなにがっかりしないで頂戴。それに、あたしはベルモットとして彼女と接している訳じゃないのよ。シャロンとして、時にはクリスとして。
親友として連絡し合ってるわけだから、お互いの情報交換なんてしてないわ」
「でも・・・」
「そうね、ボーイの言い分も分かるわ。あたしだって職業の立場を理解してるつもりよ。
だから、組織ハッカーしたり、情報収集してるわ。
それもこれも、全部シャロンの手引きなのよ。」
「どういうことだ?・その行為はノックの行動じゃねえか」

「そうね、情報の横流し。あのお方のお気に入りとは言え、ばれたらノックの可能性が出てくる。彼女の立場が危うくなるのは必然的でしょうね。
一回、それで揉めた事があったのよ。そしたらね、シャロン言ったのよ。
〝あたしを殺せるのはシルバーブレッドと貴女だけよ〟ってね。
そんな男前な事言われちゃあ、こちらとしても彼女を死なせる訳にはいかない。」
「・・・・まさか、あいつがそう思っていたとはな・・・」
「ああ、随分と気に入られたようだな」
「そうね、大変よ。情報収集から彼女の疑いが向かないように隠蔽工作・・・」
「だが、ベルモットとしてのあいつは捕まえなきゃならん。」
「それはそうね、でもね、これはあたしの勘だけど、シャロンは多分こちら側よ」
そう言いきってボーイの方を見る。
「え?」
「あたしは裏から、ボーイが表からシャロンをこちら側に入れさせるのよ。
ボーイの頼みじゃあ断れないでしょう?それに見たでしょ?シャロンの顔・・・」
「・・・時々見せる悲しそうな顔か・・・?」
「しかし・・」
「赤井君、今貴方が思っている事じゃないのよ。あれが彼女の本心」
「!!演技ではないと言うのか」
「恐らくそうでしょうね。だってあたしに情報を横流しにする様な人が演技する必要が無いじゃない?」
「その情報は確かか?」
「ええ、最初はあたしも疑ったわ。でもね、調べていくとどの情報も本物ばかり。」
「麗華と、言ったな。もしかして、ベルモットはお前が日本に来る事

知っているのか？」
「まあね、近々会いに来るんじゃないかしら？・・・バーボンと一緒に」
「「は?!」」
うん、まあそうなるわよね。言われたあたしも思ったから。
「その話は有希子が来た時にでもまた話すわ。・・・で、いつまであたしの事忘れてるつもり？秀君？」
「やはりか・・」
「は?!え、赤井さん、麗華さんと知り合いなの?!」
あちゃー、ボーイが混乱してるわ。
「・・・忘れてなどはいない。ただ、まさかと思ってだな・・・麗？」
「ちょっと待って、赤井さん、話進めないで?!」
「ふふ、ボーイにはまだ早い話かもしれないわよ？」
わざと、艶のある笑みを作ると、なんとか察したのか、顔が真っ赤だ、ウブだなあ。
「おい・・・。悪影響だ・・。」
「まじかよ・・・。麗華さん、赤井さん・・」
「分かるでしょう？ここまでくれば、あたしが特定を作らない理由を」
そう、仕事上、極秘任務だし、いくつ命があっても足りない職業である身。
あたしだって、毒薬を飲んで死なずに済んだから良かったものの、本来は死んでしまう可能性だって低いわけでもない。
関係を長く持つ事で、相手を苦しませてしまうなら、特定を作らなければ良い。
「久しぶりね、組織で貴方の名前が出てね、まさかと思っていたけれど、諜報任務の人だとは思っては無かったわ」
いや、前の世界で既に知ってましたけど、まさか原作始まる前に会うなんて思って見ても無かったし。
「あの時は、俺も若かったんだ・・・。」
「赤井さんと麗華さんって、いつ頃知り合ったの？」
「ボウヤ、その話は「秀君がまだ、ＦＢＩで一人狼していた頃よ」・・・おい」

「ってことは・・・ってことは２０代後半位？」
「そうなるわね、まあ、これ以上先は秀君のプライドが傷付いちゃうみたいだし。」
「ハハハ・・・。そう言えば、その『秀君』って呼び方・・」
「ああ、お互いに偽名を使ってたからね。
　もし、もう一度出逢いがあったなら、本名を言い合いしましょうって言って別れたのよ。」
「まさか、この場所で会うとは思ってみてもいなかったがな」
「へえ～、まあ、事情は分かったし赤井さんと同棲っていう事になるけど
　それでもいいなら、俺も別に大丈夫だよ。」
「オーケー、助かるわ。ってことでよろしくね？『君』？」
「・・・ああ。」
「じゃ、そろそろ行くよ。じゃーね、麗華さん、赤井さん」
　ボーイが去っていき、あたしと秀君だけになったリビングは言葉が生まれなった。
「・・・改めて、赤井秀一だ。」
「古雅麗華、よ。呼び名はこのままでも良いかしら？」
「ああ。そっちの方が定着するしな。まさか、こうした再会があるとはな。」
「それもあたしのセリフよ。再会の証として一杯する？」
「それも良いな。長い同棲生活になるしな。」
　もしかして、もしかしなくてもこれはフラグが立ってるんじゃ・・・。
「昔、言っただろう？必ず、見つけるとな」
　スナイパーの光を瞳に宿した彼は、それはもう野獣のような目で。
　あたしは頭を抱えたくなった。
「・・・そうね」
　まあ、こうなったからには楽しむしかなさそうね。

黒歴史なんて消えてくれない

―数年前―

あたしは、ＣＩＡという立場のにも関わらず失態を犯していた。

とある、麻薬組織のリーダーの人物が今夜行われるパーティーに参加するという

情報が入り、あたしはその潜入捜査をする事になった。

日本人特有の黒い髪をブロンドの髪に変えて、口元にはルージュを引いて白い肌をより

目立たせる。背中と胸元は大胆にして黒いロングドレスを纏うあたしの姿は日本人とは

思えないだろうと自分でも感心した。

インカムを左耳にしてそれを隠すように右側から髪を寄せて、うなじを見せる仕草をすれば、男共の視線はあたし一点に集中する。

「ハァイ、麗華、相変わらず良い身体を晒してるわね」

インカムから、聞えたのは同じくＣＩＡの後輩である、本堂瑛海。

後に黒の組織の諜報任務で水無怜奈となる彼女。

所属は違うが、たまにこうして同じ任務を受け持つ事がある。

まあ、理由は、諜報任務に出ている人数が多く、

そこで、仕事を終えていたあたしにお鉢が回ってきたというのだ。

解せぬ・・・。

ほんとはこの後、自堕落生活をしてみようと思ったのに・・・。

まあ、あたしの情報によると、この麻薬組織はあたし達ＣＩＡの他にＦＢＩも捜査に加わっているという話も出ている。

まあ、どうなろうと知ったこっちゃないあたしはそんな情報をこの任務に出ている

瑛海以外には言ってはいない。

「あら、そういう貴女だって惜しみも無く出してるじゃない？

男の目線がずっと貴女に行きっぱなしよ」

クスクスと笑うと、拗ねたように瑛海は返す。

「あ、麗華、ターゲット発見。麗華の方に進んでるわ」

「オーケー、皆、よろしく」
そう、言って会話を終了をさせた後、ターゲットがあたしに声を掛けた。
「失礼、お一人ですか？」
「いえ、友人と一緒に来たのだけれど、はぐれてしまって。」
しおらしく、見せると、あたしの恰好とのギャップに少し目を見開くが、
その後、下品にニヤリと口角を上げるのをあたしは見逃さなかった。
「それは、可哀想だ。せっかくのパーティーなのに、もし良ければ僕といかがですか」
あら、意外と紳士だこと。
まあ、その仮面の下にあるのはオオカミだろうけど。
表から見ると、不快感なんて一ミリも感じさせない。
それでも、裏でやっている事は犯罪。
さあ、どうしてやろうかしら？
今回は逮捕じゃない。
ターゲット確認と接触。そして、決定的な証拠。
視線を彷徨と、彼が居た。
そう、ＦＢＩ捜査官赤井秀一。
漫画で見る黒のニット帽は流石に被ってはいなくて、伸ばしかけの黒い髪をオールバックにして、黒のスーツを身に纏っていた。
髪を伸ばしてるってことは、黒の組織の諜報活動の下準備？
なんて、彼を見つめながら考え事をしていると、不意に目線が合った。
その後、あたしの隣にいる男を見ると、少し目を見開いた様子で、何か喋っている。
・・・多分、インカムで報告してるな・・・。
「失礼、彼女は俺の連れなんだが・・・。」
「!?」
「おや、レディを一人にしてしまった男が言う事かな？」

おいおい、突っ込みし放題じゃねえか。
誰がお前の連れだ。
そして、レディなんて言葉を発するんじゃありません。
もうあたしは三十路だよ。
「申し訳ありません。友人が見つかったので私はこれで失礼します」
「そういうことだ」
「っ！」
赤井秀一が殺気を飛ばすと、男は怯み、何も言わず、踵を返した。
「気を付けろ。あの男にも、周りの男にも、な。」
「ありがとう。あら、それじゃあ貴方にもかしら？」
フッと挑戦的な目で彼を見上げると、面白いものを見るような目でじっと見つめてくる。
「面白い。だが、そうだな。男なんて所詮紳士の皮を被った獣さ」
「ふふ、ご忠告どうも。それじゃ、失礼するわ」
赤井秀一から離れてインカムから漏れる彼女の笑い声に言葉を漏らす。
「ちょっと、笑い過ぎじゃなくて？」
「いや、まさか。助っ人が来るなんて、しかもＦＢＩの、ね」
「流石に想定外だったわ。でも、収穫はあったわよ。
今回のターゲットに発信機と盗聴器を仕込ませる事に成功したからね。」
「あら、手が早いわね。それなら、外から調べられるわね。御苦労様。」
「まだまだ、気を抜くのは早いわよ。これから、そっちに合流するわ」
瑛海とその後難なく合流した後、パーティーを後にし、仕込んだ盗聴器の内容を確認する。
それから、ターゲットの動きを目途がついたところを工作部隊が逮捕に至る計画になっている。
なので、そこから先はあたしの領域外という事でお役御免する事になった。
まあ、元々局内での仕事だから、異例中の異例の事なんだけどね。
瑛海達にそれじゃあ、と声を掛けて一足先に帰宅。

ドレスも、化粧も落して軽く変装をする。あたしと言う人物を周りから消すために。
生憎、明日は非番だしこのまま家に帰るのもなんだかもったいないなと
考えていたら、目の前にあの男が居た。
「ほぅ、まさかここまで化けるとは。女とは本当に怖い生き物だな」
え、何こいつ。喧嘩売ってる？
「あら？何処かでお会いしたかしら？生憎記憶力は良い方でね、こんなイケメンに会っていたら、忘れはしないんだけど・・・」
完璧に変装していないとはいえ、古雅麗華の人物とは被らせないほどの変装はしたはずなのに、いとも簡単にしかも一回しか会っていない彼なのに。
「俺も記憶力は良い方でね。さっきのパーティーに居た『レディ』では無いのか？」
ニヒルな笑い方に身長的に見下す形になっている赤井秀一に少しばかりの殺気を覚えたのは仕方ない。
「・・・・何の用かしら？」
「いや、ちょうど俺も仕事が終わってね。今日はこのまま帰ろうかと歩いていたら、
目の前にお前さんが目に入ってな」
「別に気に止めなくても良いじゃない？そこら辺の女と変わらないでしょう？」
皮肉たっぷりに言い返すと、彼は面白そうにクツクツと笑う。
「言っただろう？〝男なんて所詮紳士の皮を被った獣〟だと」
漫画の通り気障な奴だ・・・。
「あら、じゃあ、あたしをそこら辺の狼さんに攫われる前にナイト役を買って出てくれるの？」
「良いだろう。それにこれも何かの縁だ。この近くに俺の行きつけのバーがあるんだ。
一緒にどうだ？」
「それは、良いわね。帰りは送り狼になりそうだけど」

なんてニヤリと笑って挑戦的な目で言うと、上等だと目が物語っていた。
それからは、まあ、早い早い。
お互いに本名は止めておこう。と提案したあたしに、彼は少しばかり不服そうだったが、
承諾してくれた。
それから、久し振りにベロンベロンに酔っぱらった二人は適当にホテルに泊まって
一夜を共にしてしまった。
酔っぱらっても記憶が全部呼び起してくれる。
朝、起きた時にわずかに情事の雰囲気とその証拠だとばかりの身体のだるさに腰の痛み。
隣は余裕の表情で煙草を吸う『秀君』の姿。
お互いに、名前も歳も職業も教えていない。
そんなあたしたちが一線を越えてしまった。
思わず、頭を抱えるあたしに横から愉快そうに笑う彼。
「なんだ、後悔しているのか？麗」
その無駄に色香を漂った声で耳元を囁くのは反則だ。
「別に・・・。それに一夜限りだしもう会う事も無いでしょう？
それなら、良い思い出になったわ。こんな良い男と寝られて、ね」
負けじと、あたしは彼の唇から煙草を抜いて自分の口へと運ぶ。
予想外の行動に驚いたのか目を丸くする。
それから、新しい煙草を出して、あたしの手首を引く。
そのまま流されるように彼に近寄って、されるままシガーキスをする。
お互いに煙草を吸い合って、不意に彼が近づいたと思ったら視界を遮られた。
苦い。なんて思っていたら、キスを繰り返されてる。
段々と深くなっていくそれに昨日の出来事が脳内に遮る。
負けじと返していくと、彼に煙草を抜き取られ、火を消された。
・・・火事になったら笑えないものね。

何度か、繰り返されるキスも終盤を迎え、名残惜しそうにお互いの唇を離す。
お互いを繋ぐ糸も、プツリと途切れた。
「そうだな。でも。もしまた再開出来た時に今度こそ麗の本名を聞くとしよう。」
「それは良いわね。いつか、まだあたしたちを繋ぐ何かがその時までに残っていればの
話だけれど。」
三歳差というほんの少しの大人の余裕を見せたくて、妖艶に笑って、彼を挑発する。
そして、その挑発にノって来る彼もまだ、若いなと心の中で苦笑を零す。
こんなおばさんに何が良いのだろうと考えると同時にまあ、一種の社交辞令かと冷静に
判断するあたしの思考はやっぱり、可愛げがない。
「言ったな。必ず、見つけてみせる」
表情の硬い彼だが、目の奥には隠しようない野望がちらつきを隠そうとしない。
「ふふ。待っているわ、ボウヤ」
そう言って、睡眠薬を口に含ませて、彼に口移しをして流し込ます。
「!!」
「さあ、まだ、今日は始まったばかりよ。ボウヤは休みなさい。
あたしを見つけるのはそれからよ」
あたしの言葉を聞いたと同時に目を伏せた彼の額にキスを落して、
「この世界に生れて、貴方に会うなんてね。赤井秀一・・・シルバーブレッド」
あたしの独り言は、誰にも届かないまま。
落ちて行った。

彼の弱さ

「もう、麗ちゃんったら！心配かけて！」
「ごめん、有希子。でも、こうして直接会うなんて久しぶりね」
「もう、何年も前よ・・。体調とか大丈夫なの？新ちゃんと同じ薬を飲まされたなんて」
「大丈夫よ。あたしの悪運一番傍で見て来たでしょう？」
あれから、工藤家に居候させてもらって数日経ったある日、有希子が沖矢昴のメイクをするため、日本に戻ってきた。
空港で電話して以来、また音信不通だったから、顔を見合わせた瞬間これだ。
「有希子さん、麗さんの悪運とは・・？」
今まで、空気化してきた秀君でも、『悪運』に興味を持ったのか口を挟み出した。
「秀ちゃん聞いて頂戴よ！麗ちゃんったらね・・・」
それから、あたしがこれまでに体験してきた数々の悪運をばらしやがった。
銀行強盗事件に引き合わせた事・通り魔殺人事件の未遂だったが被害者になった事・
そして、極めつけは、有希子がシャロンとアメリカでミュージカルしていた時に起きた
役者の毒殺事件。
どれもこれも、幼馴染の優作の推理で解決出来たが。
一番の重要項目は、どれもこれもあたしが狙われた事件だと言う事。
たまたま、巻き込まれた事件ならまだ分かる。
何故、あたしを狙う?!有希子とか、居ただろ?!
「・・・・。今度、神社に行って厄払いにでも行きませんか？」
細められた目でも分かる、沖矢君の目は『絶対何か憑いている』っていう目だ。
「それは、良いわねぇ！麗ちゃんも暫くゆっくりしていきなさいよ」

「ちょっと、人を厄背負ってるみたいな言い方しないでよ」
「いや、絶対憑いてる、わよ／ますよ」」
「そう言えば、秀ちゃんと麗ちゃんって今思えば運命的な出逢いよねえ」
「？どういうことですか？」
「だって、向こうで麗ちゃんと一回会った事あるんでしょう？
それで、必ず、見つけ出すなんて言われたら、女の子なんてイチコロよ～」
ああ、爆弾発言を落された。
消えたい。
流石のＦＢＩのポーカーフェイスも防ぎれなかったようで、言葉を失っている。
「しかも、今回同棲でしょう？キャー、何年振りの再会で発展なんて、優作にお願いして
小説に書いてもらおうかしら？」
やめてくれ、それに近いうちに『緋色の捜査官』が出るから!!
なんて、これから起こることを知っている事をブチかましたい気持ちをなんとか納める。
「ゆ、有希子―？そろそろ、空港に行く時間じゃない？」
「やあね、麗ちゃん私を甘く見ないで頂戴。
麗ちゃんが新ちゃんと同じになったっていう話を聞いた時から絶対一緒に買い物行くって決めてるのよ!!」
あ、安心してね。二人の邪魔はしたくないから、私はホテルで寝泊まりするから。
なんて、語尾にハートを付けて決定事項を喋る有希子にこうなった彼女を止められるのは
夫である、優作しかいない。
でも今、この場に居ない優作を求めても時間無駄だと察しているあたしは今回は諦めて
彼女に付き合うしかないなと開き直った。
「勿論、秀ちゃの意見も取り入れたいから、一緒に行くのよ？

秀ちゃんの洋服も買わないといけないしね!!」
なんと、彼も一緒か。
そして、火の粉が彼にも降りかかっている。
・・・・。いい気味だ。
「さ、出来た!」
マシンガントークをやりながら、完璧なメイクを施していく有希子はそろそろお暇するわ、と言って嵐のように去って行った。
一応、此処は彼女の家でもあるんだけど・・・。
「・・いつ見ても、嵐の様な人だ・・・」
流石の秀君でも、疲れ切った様な声で、ぽつりと漏らす。
「いつもの事よ・・。」
「そう言えば、どうやって薬を飲んだ後、組織から逃げて来たんだ?」
「別に、組織に潜入捜査していた訳じゃないのよ。
たまたま、ジンと会ったから組織の情報を引き抜こうとしたら
感づかれてね。そのまま、ジンに薬を飲まされたのよ」
気に入られてたから、暴行はされなかったしね。
そのまま、ジンは仕事の連絡が入ったみたいで、その場を立ち去って
あらかじめ、連絡しておいたシャロンに助けて貰ってたの。
なんて、言い終わって、横に居た彼の方を向くと、隠しようのない殺気を
ダダ漏れにしている。
喜怒哀楽が激しいな、表情に出ていないだけで。
なんて場違いな事を考えていると、急に引き寄せられて、抱きしめられる形になる。
「は?!」
「お前は、危なっかしいな。」
「そこは、勇敢な行動って言ってくれないかしら?」
「ＣＩＡに居て、しかも情報局ならジンの詳細も少なからずは知っているはずだろう?
今回の事は運が本当に良かっただけで、もしもの事があればどうす

る気だ?!」
彼らしくない、感情の昂ぶりを静かに聞いていく。
ああ、彼は失ったんだ。
愛すべき彼女を、自分が任務の失敗をしたせいで。
死ぬべきではない罪のない彼女を。
あたしは、静かに彼の背中に腕を回してもピクリとも動かなくなった彼を良い事に
言葉を並べていく。
「そうね、立場上知りたくない事も流れてくるあの局内で組織のしかもジンの情報はあたしの耳にだって入ってくる。それでも、あたしもこの仕事をしている以上、
やらなくちゃいけないことだってあるのよ。それは貴方にだって分かるでしょう?」
「・・・ああ」
「確かに、今回の行動はあたしの不注意で死ぬことだって覚悟していたもの。
だからこそ、こうやって生きている事に安堵している。
・・・こうやって人肌に触れられるでしょう?」
ピクリと反応する彼にクスクスと笑ってしまう。
赤井秀一は、こんなにも不器用で弱い人なんだろうか・・・。
「あたしは、貴方達を残して死ねないわ、だから安心してあたしは死なない」
ぎゅうっと、抱きしめられる力が強くなっていく。
あたしたちの隙間など、無くすように。
「それに、日本にはボーイや貴方も知らない協力者が居るのよ」
「協力者?」
まだ、居るのか?と怪訝そうに言いながら首を傾げる姿は『沖矢君』では様になっていて
少し怖い。
「そ、明日挨拶しに行くからそのつもりで」
返事を聞かないまま、あたしは自室に戻った。

赤井ｓｉｄｅ
初めて麗と会った時、面白い女と思っていた。
あのパーティーで初めて会った時から、二度目の早い再会から一夜を共にしたこと。
多分、あの時から俺は彼女に惹かれていたんだろうか。
もし、もう一度再会できたならお互いの名前を明かそうと。
ゲーム感覚で彼女を挑発する
目を細めて笑う彼女はまさに猫のようで。
思わず、「必ず、見つけてやる」
挑発に乗ってしまった自分が居た。
それから、一服盛られ、次に目が覚めた時には、彼女の姿はもういなかった。
それからすぐだ。
ジョディとの関係の進展、黒の組織に任務。
そして、利用するつもりだった宮野明美を本気で愛してしまった事、そして
明美の死。
突然、再会を果たした彼女はＣＩＡ。
生きていたとはいえ、改めて死と隣り合わせなんだと言う事を感じさせられた。
志保をそして彼女を失いたくないと柄にもなく死への恐怖を感じた。
「あたしは、貴方達を残して死ねないわ、だから安心してあたしは死なない」
そんな俺を見越してか、彼女は俺が安心できる言葉を優しく選んでくれた。
抱きしめて分かる彼女の体温に少しずつ、抱きしめる力が弱くなっていく。
その日、俺は彼女の存在を改めて考えさせられる事になった。

彼女の協力者

あたしは、今警察庁警備局警備企画課の控室に居る。
まあ、あれだよね。うん、視線が痛いことで。
しかも、あたしの隣にはボーイの許可なく沖矢昴を連れてきている。
後で大目玉食らうかもなあ・・・。
なんて、呑気に考えていたら、上司の秘書らしき人が来た。
「失礼します。」
部屋に入ると、ある人物が二人。
一人は、古雅　劉貴（コガ　リュウキ）この総本部の司令長官。
そして、もう一人は降谷零の部下、風見裕也。
「よく、来たね。さあこちらに座ってくれ」
「ありがとうございます」
「麗、こちらの方は？」
「あたしのスペシャル協力者とでも言っておこうかしら？」
「失礼、古雅司令官、こちらの方々は？」
「ああ、そうだったな。麗、お願いするよ」
「始めまして、古雅麗華です。本職はアメリカの中央情報局・情報分析管理担当官をやっている者です。それと、もうお分かりのようですが、そこの司令官の娘です。」
チラッと、横目で昴の方を見ると、彼も予想外の出来事なのか少し翠の目がちらつく。
「始めまして、僕は沖矢昴と申します。彼女の助手をやっております」
流石にこの状況をまだ完全に読みこんだ訳ではないが、動揺を表に出さず、ごく自然にふるまう。
その様子に、司令官は気を良くしたようだった。
「念のため、言っておきますが、この事は他言無用でお願いします。
勿論、貴方方が最も信頼している降谷さんにも、ね。
まだ、あたし達の存在はシークレットの方が動きやすい。
そして、それを知る必要があるのはお二方だけで良い」

ニヤリと、思わず口角を上げてしまう。
何度も、感じた。取引の場で自分が有利に立つ時の独特のこの雰囲気。
まあ、あらかじめ知っている司令官は面白そうにこの場の状況を汲んでいる。
「・・・・。分かりました、あまり長い事上司に嘘をつきたくは無いんですがね。
勘のいい人なので、あまり、話題にしない様善処します。」
「ありがとう、助かるわ。まあ、有能じゃなければこの仕事なんて勤まらないからね。
ばれたらそれはそれで。あ、あたしの番号後で送っとくわ。」
「助かります。しかし、そんなにお若いのに流石司令官のご令嬢ですね」
「ははは、これでも後数年でアラフォーですけどね」
「!!」
まあ、二人が驚くのは仕方がない。
「ちょっとしたアクシデントでＡＰＴＸ４８６９を飲まされまして、見た目通り２０代近くまで」
「体調は変わりないか？」
「大丈夫、今のところ、体内での大きな変化は見られてないわ。」
「そうか・・。何かあったら必ず連絡するように。」
「麗華さん、どうかお気をつけて」
「ありがとう、じゃあ、そろそろ失礼するわ」
あまり長居するのも他の部下達に怪しまれるだろうと踏んで
今は近況だけを伝え、あたし達は警視庁を後にした。
「麗さん、このまま少しドライブに出かけませんか？」
「良いですね、まだ少し肌寒いけれど、近場の海でもみたいわ。」
「了解しました」
暫く、車を走っていくと潮の匂いが近くなっていく。
「そろそろ着きますよ」
それからもう少しすると車がパーキングエリアに止まった。

海開きをしていない海はやっぱり寒くてそれでいて、居心地が良い。
昴君の車に寄りかかりながら、海を見ていると
風邪を引きますよと、と昴君が車から引っ張り出しタオルケットを二人の身体を包み込む。
「ねえ、麗さん。貴女は僕達には想像も付かないくらい大きい物を背負っているんでしょう。だったら、僕にも分けてくださいよ。『スペシャル協力者』なんでしょう？
共犯位、僕にも出来ます」
何を言い出すのかと思えば、まるであたしのこれまでを知っているかのような話し方。
「・・・秀君としては？」
「お前が背負っているものを俺にも背負わせろ。」
「あら、今度は命令形ね。・・・ボウヤには荷が重いわよ」
「もう、ボウヤと呼ばれるほど若くは無いんだがな」
「あら、それはあたしが決める事よ。」
「それで？どうなんだ、イエスかハイしか聞かないが」
「強情ねえ。もしノーと言ったら？」
からかい半分好奇心半分で聞いてみると、彼の開かれた瞳は容姿とはそぐわない翠の色があたしを射抜く。
元々、距離が近いあたし達は秀君の腕が腰に回され率い寄せられたおかげで
もっと近づいていく。
「あんたが、イエス言うまで離しはしないさ。」
耳元で囁かれる言葉はまるで恋人に愛を伝えるかのような響き。
そのままもう片方の手があたしの頬を愛でるように撫でていく。
それがくすぐったくて、目を細めると、視界が翠に染まった。
頬を撫でていた手が後頭部に回されて、腰に回されていた腕も力が入れられて
本当に離してくれない。
バードキスから、段々と深いものに変わっていく。

ようやく、離れた唇に少しだけ、寂しいなと感じた自分にやっぱりかと苦笑いをする。
「秀君に、言われるまでもなくあたしは巻き込もうと考えていたって言ったらどう思う？」
「その方が俺は嬉しいがな。・・・先に言っておくが、俺はお互いの損得だけで行動しているんじゃない。組織壊滅後も俺はあんたを離すつもりは無いと思っておけ」
「・・・、秀君はそんな器用な人じゃないでしょう？
分かってる、分かっている上であたしはオーケーしてるの。」
そんな乙女心も分からない様じゃ、まだまだ『ボウヤ』呼びは卒業できないわね。
なんて、挑発してみると彼は猛獣の様な目つきで舌を舐めずる。
「言ってろ、『ボウヤ』なんて呼べないようにすれば良いだけだ」
なんて、言って噛みつく様なキスをお見舞いされたあたしは彼の背中に腕を回した。
〝小さな幸せも大きな幸せも愛せるのは自分の器用次第。〟
そう教えてくれた母の言葉をあたしはふと思い出した。
そして、その続きは
〝けれど、愛しい人の隣に居れば小さいも大きいも関係なくなるものなのよ〟
なんて言ってたっけ。
まさに、その通りだと改めて感じた瞬間であった。
・・・なんて考えていたら。
「考え事とは随分と余裕じゃないか、麗」
あー、やばい。
これは明日あたし、生きてないわ。
「貴方と居られて幸せだと浸っていたのよ」
お返しとばかりにキスを返すあたしにクスリと微笑む貴方が居た。

すでに手は組んでいる

「そういえば、俺だけ麗華さんの事知ってて、灰原の事言ってねえな」
と休日の昼下がりに工藤邸に遊びに来たボーイが唐突に言い出した。
「彼女か・・・。」
ふむと、考え込む秀君。
「大丈夫よ、この前メル友になったから」
「「は??」」
その、いつの間に接触したんだ?と目が語っている。
「麗華さん、いつの間に?灰原からもそんな事聞いてねえし・・・」
「詳しく、説明しろ」
あー、まじか、めんどいな。
「この前、秀君が出掛けてた時に、あたしも暇持て余してたから、散歩がてら
ふらふらしてたのよ。そしたら出掛け先で事件に巻き込まれて、そしたら彼女も一緒にそこに居たのよ」

秀君が出掛けた事良い事に、あたしも少し出掛けようかと思い、
近くのカフェに足を運ぶ事にした。それが、行けなかったのかカフェでパソコンをしてたら、女性の叫び声が店内に響き渡った。
そう、殺人事件。
なんてこった。取り敢えず、目立つ行動は控えようと思い、警察の連絡だけをしておいた。
その後、誰かが店を出ないようにと声をかけ、死体を観察し始めた。
あたしも、周りを見てみると、宮野志保・・・、今は灰原哀ちゃんもカフェに居た。
それから、警察も到着し死体を観察していた彼の推理力によって無事に事件は解決した。
緊張感の漂った空気から、肩の力が抜けたように皆ほっとしてい

た。
「はあい、とんだ事件に巻き込まれたわね、志保ちゃん？」
彼女に、近づいて小声で彼女だけに聞えるように、話しかける。
「!!!・・・誰？」
案の定、警戒する彼女に、やらかした、と内心焦ったが、気にしない。
「此処は、空気が悪すぎるわ。貴女のお勧めのカフェに連れって行って頂戴？」
恐怖と、警戒に顔を青くする彼女の不安を少しでも和らげるためにメモ用紙を彼女に渡す。
内容を見た瞬間、パッと顔を上げた彼女に笑って、頭を撫でた。
それを、彼に見られていたという事に気付きながら。
「改めて、古雅麗華よ。よろしくね、哀ちゃん」
「・・・。貴女といい、彼といいもう少し警戒心を強めるべきだわ」
お互いの素情を話し、敵意は無いという事が彼女に伝わったみたいでホッと息を吐く。
「あら、これでも充分警戒してるわ。貴女も気を付けた方が良いわ。例えば、『彼』とか・・」
「・・・、そうね、ひょっと出て来た『彼』は特に、ね。
貴女もあの薬を飲んだんでしょう？身体に異常は無いの？」
「特に無いわね。それに、なにかあったら、すぐに貴女の所に駆けこむから大丈夫。
今、貴方のお隣に住んでるから」
「!!あの人と、住んでるって大丈夫なの?!」
「大丈夫よ、彼はあたしの協力者よ。大丈夫、貴女を危険に晒す様な真似は彼はしない。
何があっても、貴女とボーイだけは守り通すわ。」
「・・・そこら辺の男の人より、熱い口説き文句ね・・・。
貴女を信じるわ・・。だから、死なないでよ」
凛とした目には覚悟を浮かべて、その表情は直接会った事は無いがそれでも、組織のせいで命を落とした、宮野明美の姿と重なって見え

た。

「ってな、感じでその後メルアド交換したのよ」

はい、終わり。

「ねえ、『彼』って安室さんだよね・・？」

「それより、どうして事件に巻き込まれていた事を知らせない」

複雑そうに、ジト目でこちらを見る。

「あ、うんそう、事件協力してたのは自称毛利探偵の弟子『安室透』

事件の事は、別にあたしの事件体質は今に始まった事じゃないしなあと思って？」

はあ、と深いため息を吐きながら、ボーイと秀君が目を見合わせたのは見ないふりをしておく。きっと、長年の勘では関わると碌な事がないとあたしに訴えてきている。

「あんた、もう少し危機感というもんを備えてくれ・・。

それでなくても、彼に今目を付けられたら、面倒な事が起きる・・。」

「大丈夫よ、それに近々シャロンと会う予定だし・・。彼とも接触すると思うし。」

「・・・・・。」

それから、何を言っても無理だと判断した二人は、内密に博士にＧＰＳ付きのアクセサリーを作って貰うようお願いしたのを、あたしは知らない。

漆黒の追跡者

それは、突然起きた。

No.1

昴君と一緒に住み始めて少し落ち着いた頃。

昼食を終えたあたしと、昴君でニュースを見ていた。

『続きまして、こちらのニュースです・・・。

ここ最近、関東圏内で連続殺人事件が多発しているとの情報です。

犯人の手掛かりはまだ掴めていないとの事です・・・』

「近頃、物騒ねえ・・・。」

「そうですね・・。早く捕まれば良いのですが」

なんて、のほほんと他人事のように駄弁っていたあたし達に一本の電話が入った。

「はい、古雅ですが・・」

「麗華さん!!!今、昴さんと家に居る!?」

「う、うん。どうしたのボーイ?」

「詳しい事はそっちに行ってから説明するから、家に居て!」

言いたい事言った後、プツリと切れた電話に昴君が不思議そうにこちらを見る。

「どうかしたんですか?」

「今から、ボーイがこっちに来るって」

「??そうですか、ではお茶の用意をしてきますね」

暫くしてから、ボーイが険しい顔で口を開いた。

ボーイの話によると、ニュースで騒がせていたあの『関東圏内連続殺人事件』で

一都五県の刑事達が集まり合同捜査会議が開かれ、それに特別顧問として毛利探偵も招かれ、ボーイも事件の内容を知ることが出来たのだと。

そして、会議が終わった後、ボーイは会議に参加していた、一人の刑事が

ジンの車と同じポルシェ３５６Ａに乗り込む所を目撃したという

のだ。
流石のあたし達も状況が分かり、眉間に皺がよる。
「一応、気を付けて、二人とも今は死んだ事になっているし、麗華さんは軽く周囲にも顔がばれてる。外に出ていく時は一応変装していった方が良い。
ついさっき、入った情報によると、この事件の犯人は今米花町に居るって話だ。
可能性として、黒の組織が絡んでいるかもしれない」
「それは、あり得る話だな。わざわざ刑事に変装してその会議に参加すると言う事は、
犯人を揺るがしているという事もある。
どちらにしろ、俺達の周囲の警戒を高めなければならんな」
「ＯＫ―、大丈夫よ。ボーイ、貴方と哀はあたし達が必ず護るわ。
あちら側には、敵だとしても力強い味方があたしにはいるしね。」
待て待て、もしかしてこれあれじゃない??
パターン青じゃない？
いやまさかと思ったよ?!だって、死神並だよね？出歩くたび事件に首突っ込むもんね？
「(漆黒の追跡者ですか・・・)」
ポーカーフェイス完璧にしてて良かった・・・。
この二人は勘が嫌って言うほど冴えてるからな。
ってことは、黒の組織が変装して刑事に紛れてるってことは多分、アイリッシュ。
そんでもって確か、指紋を取られて・・・・。
これ、フラグ立ってね？
まじかー。
どうしようか・・・。いや、このまま知らない方が良いかもしれない。
本作アイリッシュはピスコを殺したジンを憎んでいたし、
このままボーイが工藤新一と同一人物と確信を持っても言いはしない。

でも、確かボーイを庇って死ぬんだよな・・。
これだけは避けたい、なんてたってジンと同じ幹部並だ。
情報も手に入る。
問題なのは、どうやってアイリッシュとアイコンを取るかだ。
「どうしたの、麗華さん？」
「ん？いや、どう動こうかなあって。」
「・・今までの話を聞いていたか？」
「分かってる、けどこれはある意味絶好のチャンスなのよ。」
「!!どういう事？麗華さん」
「アイリッシュは、ジンを憎んでいるからよ。
ピスコをジンに殺されたからね」
「!!!
!!」
まあ、ボーイは知っているでしょうね。ピスコと対面した事があるだろうか。
「ピスコとアイリッシュの間に何かあるのか？」
「良い所に目が行ったわね、秀君。そう、アイリッシュにとってピスコは父親の様な存在の人だった、そんな人がいくら仲間の幹部であろうジンに殺されたってなったら、
流石に、目の色変えて親の敵と思うでしょうね。そんなアイリッシュがジンと一緒に行動している、何かありそうじゃない？」
「確かに・・・、それにあの変装術はベルモットからかもしれない。
・・・ベルモットも一枚噛んでるな・・」
「そう考えるのが妥当だろうな・・・。
ボウヤ、下手に目立つ真似はしない方が良いな。
アイリッシュの前で、目立った行動をすると怪しまれる、それこそ、工藤新一と江戸川コナンに結び付く可能性も少なくも無い。」
お、頭の回転が速い秀君は少しの情報だけでこれだけの可能性をだすのか・・。
怖いな・・。
その後、映画通りに事が動いたようで、
容疑者の1人が米花町に現れるとの情報が入り、ボーイは取り敢え

ず、毛利さん達と行動を共にする事となった。
残された工藤邸であたしと昴君こと秀君との作戦会議が開かれた。
「あたしは、今回の事は流れに身を任せても大丈夫だと思うわ。
下手に、あたし達が手を出して、アイリッシュはともかくジン達にバレたらそれこそ
あたし達おジャンよ。」
「確かに・・・。アイリッシュが本当にジンを嫌っていたとして、
そしてそれがボウヤの命を護れればいいのだがな。」
「それは、あたし達の役目よ。表はあのボーイが。
裏から、あたし達が手を回せばいい。頭の切れる敏腕のスナイパーの貴方と情報局担当のあたしよ?」
不敵に笑ってみせると、秀君にあまり無茶はするなと言われてしまったが。
それから、お互い情報収集をするために部屋に籠った。
あたしは、ＣＩＡの唯一あたしの生存を知っている上司に今回の話を持ちかけ、
情報を取ってもらった。
「(この後、確か連続殺人事件の第一被害者を刺す傷害事件を起こした犯人が見つかるんだっけ・・・。けど、確か・・・・・・。駄目だ、思い出せない。)」
引っかかる、そう簡単に、犯人は見つからない・・。
誰だ・・・。
まだ、ボーイの情報も少ないし、迂闊に外には出られない。
けど、確信が持てるのは今夜アイリッシュにボーイの正体がばれてしまう。
「麗、そろそろ休め。もう夜だぞ」
「!!
!!」
「その様子だと、気付いてなかったみたいだな」
「あー、時間経つのって早いわ・・・・。」
「・・・２０代の発言する言葉じゃ無いな・・・」
「精神は、４０代よ。喧嘩売ってるなら、喜んで買うわよ。体力は、

アップしてるからね」
「おっと、それは怖い。止めておこう。現役だが、無駄な怪我はしたくなからな」
「よろしい。っさ、夕ご飯作りましょうか」
「もう、出来てる。だからあんたを呼んだんだ」
「んじゃ、行きますか」
「お手を、どうぞ？」
昴君の姿でエスコートをされると少し、いやかなり胡散臭さが増す。
「失礼な事考えていると、夕ご飯の量、減らしますよ？」
「そんな事、考えてないわよ。」
「そうですか」
あぶねえ・・・！なんだ、この人。いや元から侮れない人だとは知ってるけど、
そんな薄い目で、良くあたしが考えてる事分かるなんて・・・ねえ・・・。
「どうやら、麗さんは今夜は寝たくないようですね・・・。
それなら、僕に少し付き合ってください。良いですよね？」
死亡フラグ回収したかと思ったら、死亡フラグが倍になって帰ってきやがった・・・。
この後、死亡フラグを回避出来なかったあたしを秀君は本当に寝させてくれなかったのは言うまでもない。

漆黒の追跡者　Ⅱ

No.2

ボーイから、ちょくちょく工藤邸に来て、情報交換するという最近恒例になっている気がするが、まあ気にしない。

「それで、昨日ベルモットと直接会ったよ。

やっぱり、今回の件はベルモットも関与している可能性が高い。

麗華さんの言った通り。」

「どういった経緯でボウヤと接触したんだ？」

「それが、人質だったんだよ。

あれから、警察が、連続殺人事件の第一被害者を刺した傷害事件の容疑者『深瀬稔』が犯人として、張り込みをしてたんだ。でも警察のミスで張り込みがバレて、近くに居た女性が人質にされた、それがベルモットだった。なんとか、取り押さえる事に成功したんだけど、その、『深瀬稔』は、肩を怪我してる事が分かった、加えて今回の被害者が殺害された凶器は鈍器。肩を痛めている人が人を鈍器では殴れない。」

「ほう・・・・。よく、人質の女がベルモットだと、分かったな」

「人質の人、『深瀬稔』が持っていたナイフで少し、切られたんだよ。

なのに、血が出ない・・。おかしいと思って、追いかけたらベルモットだった。」

「なるほど、だからアイリッシュに潜入させたのね」

「どういういうことだ？」

「さっき、ＣＩＡから連絡が来たのよ。

広域連続殺人事件の被害者の中に一般人を装って組織の工作員が居るらしくて

犯人に持ち去られた所持品の中に、工作員のリストが入ったメモリーカードを取り返すために、アイリッシュが潜入してるってわけ。先に警察に犯人を捕まえる前に」

「流石、情報課分析管理担当だな・・。仕事が早い。」

「ああ、ベルモットが言ってた事と同じ。嘘はつかれてねぇみてぇだ」

「それで、どうしましょうか。ドローンでボーイの小学校と高校の教室に隠しカメラを設置してみたけれど、多分、今夜か明日辺りよ。
あたしの憶測が正しければ、『深瀬稔』逮捕に至る時に、警察に変装したアイリッシュがいたとすれば、ボーイの事が気になり始める頃合いね。腐っても組織の一味。
多分調べるわね、アイリッシュの正体、先にネタバレ公開する？」
「それより、俺の指紋をどうにかしてくれえねえのかよ・・・」
「無理よ、あたしは工作員でもないタダの情報局に居て、ワーカーホリックなだけ」
外で、秀君みたいに銃ぶっぱなしてる事は滅多になかったのよ」
「おいおい、酷い言われ様だな。俺もデスクワークの仕事はあったぞ？」
「それでも、今までの任務は諜報活動でしょ？情報収集はハニトラってところかしら？」
「・・あながち、間違ってはないな」
「赤井さん、せめて間違ってるって言ってくれよ・・・」
「無理ね、正論だもの。」
緊張した空気が溶けて穏やかな空気が流れ始める。
「まあまあ、今夜の事はあたしに任せておきなさい。ただし、犠牲は少しばかり出るかもしけれど。」
ウインク付きで言ったあたしを、期待していると男二人にプレッシャーにかけられる嵌めになった。

深夜、設置していた隠しカメラから動きが見られた。
その正体はやはり、アイリッシュとみて間違いないだろう。
授業で作った、粘土の指紋と高校で取った何かしらのボーイの指紋。
そして、それを組織には内密でボーイの正体を知る。
さて、ここから彼はどう動くのだろうか・・。
と言っても、彼が成り済ました本物の刑事は多分、ボーイの小学校仲間が見つけるはず・・。

そこは、ノータッチでも大丈夫だ、問題は彼をどうやって、死なずに確保するかだ。
この事件の真犯人は、確か『本上　和樹』だ。
彼の妹『本上　ななこ』と彼女の恋人だった『水谷　浩介』
彼の連続殺人事件の動機は、彼女の死に関係する人達だったはずだ。
それを、『水谷　浩介』に全て、なすりつけるため・・。
その後に駆けつけてきたのが・・・・。
駄目だ、糖分足りなくて頭回んない。
そうこうしているうちに、アイリッシュは撤退しようとしていた。
『盗み見とは、いけ好かねえな』
・・・・・・・・やっべ、気付かれた。
カメラ目線で話をしてくれるアイリッシュ。
暗視カメラで、良かった・・・。
これを録画して、分析をしていくと、ある程度体格が判明する。
それを元に、彼が誰に変装していくのに都合が良いか、頭を回転していく。
そして、ある人物にたどり着く。
マイクを口元に持っていき、カメラ越しに挨拶する。
「はあい、アイリッシュ。はじめまして。」
『女？・・・・てめえ、何者だ』
「そうねえ、シェリーの次に執着された女って言えば、分かるかしら？」
これは、組織内でも結構な噂で広まっているだろう。
だって、いつも言ってたものね。
「(お前の最期を見るのは俺1人だけだ)」
今思えば、随分熱烈な殺し文句だわ。
『お前が・・・。ほう、死んだと聞いていたがまさか生きていたとはな』
「お生憎様、悪運だけは強いもんでね」
『この事を、ジンに俺が知らせるかもしれないのに、よくこうして喋れるな』

「あら、それを言ったら貴方の方が先に殺されるわよ、彼他の男の口からあたしの名前出ただけで、随分な殺気を出すもの。それに、あたしは彼の目の前で一度死んでいるし
信憑性が低いわよ」
クスクスと笑いながら挑発すると、アイリッシュは苦虫を潰した様な顔で口を閉ざす。
『随分と、計画的な女じゃねえか。おもしれえ』
「あら、これ位やらないと何処までも追いかけてきそうなほどのストーカーじゃない？
まあ、貴方は喋らないわ、よその指紋の結果がどうであれ。」
『この指紋の奴の事も知っているのか。近いうちにもしかしたら、あんたの顔を拝めるかもしれないな』
「そうね、会うのを楽しみにしてるわ、アイリッシュ」
言い逃げして、カメラをシャットダウンする。それから、ＵＳＢメモリーに保存してから、痕跡を消す。これで、今夜の仕事は終わった。
物語がこのまま進めば、明日の夜ぐらいには決着がつく。
最終舞台は、東都タワーで間違いない。
「貴方の思い通りにはさせないわよ、ジン」
小さく呟いた、あたしの独り言は、暗闇に溶け込んでいった。

漆黒の追跡者Ⅲ（完結）

No.3

さて、あたしが今何処に居るのかと言うと！

「風、強いんだけど吹き飛ばされそう」

そう、色々と吹っ飛ばして、最終決戦と事がもう運ばれていた。

いや、少し語弊があるな。

あれから、疲れでもろ爆睡してたら、夕方近くまで寝ていたらしく、推理オタクの秀君とボーイはあたしの存在を忘れて推理にふけりやっと、正体がつかめたと分かった時には、もう時間が無いと分かりその後、

誰か忘れている、そこでやっとあたしの存在の気付き死んだように寝ているあたしを叩き起こしに来て、誘拐の様に東都タワーに向かった。

待って、てかあたし達組織にばれちゃいけないのに、なんで連れて来たの?!

水谷浩介と本上和樹と蘭ちゃんは気絶している。

着ていた、上着を蘭ちゃんの身体に被せ、あたしもその場を離れた。

「はあい、随分と派手にやってるじゃない？いたいけな少年に暴行なんて、ねえ？」

「麗華さん!!」

「あんたが、昨日の・・・。ジンが執着している女・・・」

「それより、出なくて良いの？電話？多分ジンからでしょうね」

「ご名答。後であんたの正体とそこの兄ちゃんの正体も話してもらうからな」

多分、それは出来ない相談よ。

なんて、口には出さないけれど。

「大方、ジンにあのメモリーを見せろっていう指示でしょうね」

あたしは、その隙に横になっているボーイを起こし、これからアイリッシュがどう動くか警戒する。

時間的にも、後少しで警察達も来る頃だ。

アイリッシュから、外に目線を向けると、そこには、ヘリコプター。
一応、あたしの今の恰好は大きめのフードで顔と背格好を隠しどうにか女とばれないようにしている。
「あんたの言うとおり、外に出てメモリーを見せろだとよ」
「まあ、ヘリの中で待機してるキャンティに撃たれるかもしれないっていうリスクも高くないけど?それでも、外に出る気?」
「ふん、俺一人が死んだとしても組織の中で何かが変わる事は無い。せいぜい、ジンの足引っ張る事が出来ただけでも俺は満足だ。」
「ご尤もな意見ですね。ですが、それでは僕達には利益が無い。此処は、強行突破と言う事で意地でも貴方を死なせるわけにはいかない」
そうこう言っているうちに痺れを切らしたのか、このフロア全体にヘリから攻撃がされる。一望を見渡せるようにとガラスでできている為、脆い。
身を隠していると、その隙にとアイリッシュが外に出て、メモリーを上に掲げる。
それと同時に、ボーイが後を追いかける。
案の定ボーイに組織の目が行く。ボーイを庇おうとするアイリッシュ。
背中に何発も銃弾を受けながらも、アイリッシュはボーイを庇う。
その隙に、秀君はヘリの死角に入り、ライフルを構える。
「しっかりしろ!!!アイリッシュ!!!」
叫ぶ、ボーイの声にアイリッシュは
「追い続けろ、俺達を」
そして、あたしを見て
「欺き続けろ、俺達を」
最期に、秀君を見て。
「そして必ず、捕まえて見せろ。俺達を」
その言葉と同時に、秀君の撃った弾がヘリの一部に当たり、ヘリは撤退していく。
アイリッシュは目を閉じ、亡くなった。

直後、警察が到着し、漆黒の追跡者の物語は、終盤を迎えた。
あの後、警察が姿を現す前に、あたしと秀君は身を隠しなんとか工藤邸に帰宅。
流石に、ライフルを所持している所を見られたら、流石に誤魔化しきれない。
「結局、組織の情報手に入らなかったか・・・。
惜しい、人物も今はいない・・。」
ぽつりと、嘆いたあたしの言葉に、風呂から上がったばかりの秀君が、
「そうだな、だが彼の言葉で俄然やる気はでた。元々逃がすつもりもない獲物だ」
変装をしていない秀君の恰好で鋭い翠の目が光る。
「そうね、逃がしはしないわよ。でもそろそろ気付く頃じゃない?彼」
「そうだな・・・。でも、今は今だけは、この時間を堪能したい。」
そう言って、後ろから抱き締めて、首筋に顔を埋める姿は３４歳だとは思えない。
「ちょっと、髪から水落ちてるんだけど・・・。冷たい」
アメリカに長くいたからか、彼の今の恰好はズボンを穿いているだけで上はタオルだけだ。
彼は、あたしの言葉を無視して、スキンシップを激しくしていく。
耐えきれなくなって、後ろを振り返るとそれを待っていたかのように、
初っ端から、深いキスを送る。
ああ、今夜は眠れそうにもない。
「(でも、まあ良いか)」
目を閉じて、応えるようにキスを返した。
ＦＩＮ

休息の一時

映画版「漆黒の追跡者」がつい先日やっと終わり。
久し振りに、秀君とデートする事になった。
だが、しかしここで平和にデートが楽しめるとはあたしは思っていない。
この悪運を持っているあたしとなにかと事件体質の彼と外を出歩いているという事は
何かしら起きてもおかしくない。
「あ、麗華さん!!!昴さんも!!!」
ああ、ほら可愛らしく手を振ってこちらに駆け寄ってくるボーイ。
そしてその後ろには
「あ、コナン君!!!」
工藤新一の幼馴染の毛利蘭と鈴木財閥の鈴木園子、そしてボーイッシュな髪形に笑うと八重歯が見えるあの目元が秀君そっくりな女の子。
「こんにちは、昴さん。そちらの方は・・・?」
「もしかして、昴さんの恋人ですか?!」
おませな彼女達は頬を赤く染めて興奮している様子を苦笑をしながら、ボーイは見守っている。
「そうなんですよ、僕には勿体ない位の素敵な人ですよ」
「きゃー!!!かっこいい!!!あたし、鈴木園子です!!」
「はじめまして、古雅麗華よ。園子ちゃん。
それと、もう覚えてないと思うけど、蘭ちゃんと会ったことあるのよ
優作と有希子の知り合いでね、新一も顔見知りなのよ」
「え、そうなんですか!!すいません、私覚えていなくて・・・。」
「良いのよ、本当に小さい頃に一回会ったきりだったから。
それと、そちらのボーイッシュなお嬢さんは?」
「お嬢さん」のキーワードに目を輝かせた女の子は
「すげえな、あんた。僕の事一目で女だって、分かるなんて!!!」

おお、凄く興奮している。
今、隣にいる男と同じ血が流れているのかという位、性格が似てない。
「僕、世良真澄!!よろしくな!!!」
幻想だろうか尻尾振ってる彼女しか見えない。
「よろしくね、真澄ちゃん園子ちゃん、蘭ちゃん」
「はい!!もし、今度時間あったら、蘭の事務所の下に喫茶店あるんですけど、
よかったら、そこで話しませんか!!!麗華さんと恋話聞きたい!!!」
「いいわよ。じゃあ、あたし達はこれで・・。また今度ね」
そう言ってそそくさと逃げるあたし達に後ろでまだ興奮している様子の園子嬢。
「それにしても、貴方の妹、外見だけ似てて中身は全く似てないわね。
けど、探偵業なんて彼女らしいわ」
クスクスと、思い出し笑いするあたしに
「こうまで、似ちゃ困る。あいつの好奇心は俺達でも手に負えない時があったな・・。」
「それは、貴方もでしょう。流石、兄妹ね。
さあ、『デート』の続きしましょうか?」
「お手をどうぞ?」
・・・・・
っていうのが、一昨日の出来ごと。
さて、この状況はなんだ。
街中を歩いてたら、目の前の女子高生三人に、連行され気付いたらポアロに入り、例の恋バナの餌食にされた。
まだマシだったのは、ポアロでバイトをしている安室が居なかった事。
あぶねえ・・・。
それから、質問攻めに合って、やっと解放されたときに園子ちゃんが
「今日は、話聞かせてくれて、ありがとうございました!!!

お礼に、今度鈴木財閥で開く、パーティーに来てください!!
キッド様の予告が入ってるあのパーティーです!!!!」
面倒事は、倍になって帰ってきてしまった。
招待状は、あたしと秀君と二人分ちゃっかりあるらしく、拒否権も根こそぎ取られた。
まあ、この女子高生三人とも連絡先を交換してしまったし。
帰り際に、絶対、来てくださいね!!!なんて言い逃げされたら、行くしかない。
存分に、年下には甘いあたしが今回折れる羽目になった。
「っていう事で有希子ちゃんのドレス貸してもらっていい？」
「いいわよ～。むしろあたしが、麗ちゃんのコーデイネートしたかったわ!!!
それって、いつ開かれるの？」
「ちょっと待って、あったあった。あと、三日後のだからまあ余裕よね」
「三日後ね!!!ねえ、優ちゃーん、あたしちょっとだけ日本に行ってきてもいい？」
「ねえ、待って、あんたまさか・・・」
「そのまさかよ!!優ちゃんには、久し振りに会っておいでって言われたし、
パーティーに間に合う様にしていくから、待っててね!!!」
ブツっ
マシンガントークブチ込んだ後、人の返事聞かないで切りやがった・・・。
「どうしたんですか？眉間に皺寄せて、怖いですよ」
「あ、そう言えば秀君にも言わないと。
これ、さっき園子ちゃんから貰った招待状。」
三日後に開催される鈴木財閥主催のパーティーに展示される、サファイヤ。
それを、今注目されてる怪盗キッドが狙うと予告が出て、今では大スクープされている。

まあ、殺人事件なんて多分起きないと思うけど。・・・・そう多分。
怪盗キッドとボーイの対決で無事、終わってくれればいいけど。
「ほう、鈴木財閥の・・・。興味深いな。それにあのパーティー以来だ。」
「へえ、あの後すぐ組織の任務に入ったんだ。」
「まあな、最近巷で有名なあの怪盗キッドも予告を出しているパーティーだし。
喜んで、君のエスコートをさせてもらうよ」
くっそ、年下に翻弄されてる!!悔しい・・・・!!!!

とかなんとか言ってるうちに、翌日有希子が工藤邸にやってきました。
何故か、優作も一緒に。

亡霊の逢引

パーティー当日。

有希子にあたしは引きずられ、秀君は優作に引きずられ。お互い準備が出来たら落ち合おうとのこと。なんでも、会ってからのお楽しみなんだと。

有希子のマシンガントークと手さばきで、どんどん鏡の向こうのあたしが別人になっていく。

「麗ちゃん、若返ってお肌つるつる！化粧のノリ全然良いわー!!」

「完全に前のあたしの嫌味ね。」

「やあね、そんなんじゃないわよ!!よし、次は髪ね」

ただいまのあたしの恰好は、

女としては長身の１７０センチを活かし、緋色のオースティン・スカーレット。

下品と感じさせないのは流石有希子というべきか。

その上から、軽めのストールをかける。

ヒールは慣れている高さにして全体的に黒がアクセントとなる白い宝石がまた綺麗。

髪は肩くらいまでの長さだから、アレンジし放題。

「出来た!!!うんうん、我ながら良い出来ね!!」

「ほんと、手際いいわね・・。ありがと有希子」

「久し振りに、麗ちゃんを飾ったからねえー。

折角日本に来たからあたしも、今から優作とデートするの！」

「いつまで経ってもバカップルね・・・。

これは感謝の気持ちとして、これあげるわ。そこのレストランのオーナーと顔見知りでね。あたしの名前出せば、良い席くれるわよ」

「ありがとう、麗ちゃん!!!」

「はいはい」

そこから、優作たちも準備が出来たらしく有希子も身だしなみを整えていく。

「きゃー、昴君かっこいい!!

うちの麗ちゃんも負けてないでしょう?!」
「昴君」の容姿での正装は、髪はあまり弄ってないけど、片方だけ耳に髪をかけて
スーツはカジュアルだけど上品さも出ていて、極めつけはネクタイの色だ。
ネクタイの色は、あたしのドレスと同じ緋色。
変声機は、スーツでぎりぎり隠れている感じ。
「さあ、もうそろそろ時間だね。楽しい時間をありがとう、有希子行こうか」
「じゃあね、楽しんできて!!」
有希子と優作が去っていき、あたしと秀君もパーティー会場へと足を運んだ。
会場へ着いたものはいいものの、まだ園子ちゃん達が来ていないと分かり、
噴水のある庭に行くと。
グイっと、秀君が回していた腰を引かれ、距離を縮める。
誰も居ない、二人だけの空間に少し緊張する。
ピっと、変声機が切る音がしたと思ったら耳元で
「綺麗だ。あの頃よりも危険な立場になったが、今だけは「赤井秀一」に戻らせてくれよ。」
「お互い、亡霊同士よ。外ではあたしも軽く変装はしてるし。
貴方に至っては公安に目を付けられてる始末だし。
・・・でも、そうね。今だけは休息と行きましょうか」
近づいていく顔に、キスされるのかと呑気に考えていたら、それは口じゃなく、おでこにリップ音が鳴った。
「流石に、二人だけと言っても公共の場だしな。
俺も、口紅を付けたくはないんでね。」
「それは、最後に取っておきましょうか。そろそろ、あの子たちも来るはず」
それと。
「昴君の恰好も好みだけど、あたしは、秀君の方が好みよ。」

してやったりとニヤリと笑うと、柄にもなく耳が赤くなっている。
そんな所を。
「ちょっと!!!あの二人、さっきからすっごい良い雰囲気じゃない?!」
「園子!けど、大人の雰囲気っていうか・・・」
「ちゃっかり、人の目を遠ざけてる所とか抜け目ないな」
あの女子高生三人に見られてるなんて、露知らず。

それから会場に戻ると、
何故か、興奮している女子高生と毛利小五郎とボーイと会えた。
「始めまして、古雅麗華です。有希子から小五郎さんの話は聞いていますよ。
あの有名な探偵「眠りの小五郎」とか。お会い出来て光栄です」
「やあ、貴女のような綺麗な方に私の名前を知っていただけるなんて、恐縮です。
改めて、毛利小五郎と申します。何か困ったことがありましたら、どうぞこの毛利に!!!」
鼻の下伸ばしながら、言っても説得力皆無だけどね。
蘭ちゃんは慌てて、お父さん!!って怒ってるし、ボーイは乾いた笑みでやり過ごしてるし。
「麗華さん!!本当、綺麗ですね、女のあたしでも見惚れちゃいます!!」
「ありがとう、園子ちゃん達だって充分可愛いわ。ナンパされないようにね」
「大丈夫さ、僕が二人を護るからね」
ウインク付きで真澄ちゃんが言う。
そんな彼女の服装は、ドレスコートじゃなく、カジュアルなパンツスーツ。
まあ、彼女らしいっちゃらしい。
「なかなかのボディーガードね、頼もしいよ、真澄ちゃん」
「麗華さんには、立派なパートナーが居るから大丈夫だろ?」
「そうですね、今日の麗華さんの恰好は一段と素敵ですからね。心配ですよ。」

「ちょっと!!聞いた今の!!!昴さんサラッと言っちゃう所ほんとカッコ良い!!!」
「落ち着いて、園子!!・・でも、ほんと憧れるなあ。」
「なに、旦那の事でも考えてんの、蘭ったら」
「べ、別に新一の事なんか考えてないよ!!」
「新一君なんて、言ってないけどね!!」
園子ちゃんにからかわれて真っ赤になってる蘭にボーイは居た堪れなさがとてつもなく感じる。
分かる、ガールズトークは自分達が居ない所でやってほしいのよね。
「そ、園子ねえちゃん。そろそろ次朗吉おじさんがくるんじゃない?」
「あ、そうだった!!じゃあ、ちょっと抜けるけど、簡単に何か立食しておいて!!
ゆっくりしていってくださいね、麗華さん!昴さん!!」
慌ただしく、園子ちゃんが挨拶しに行くと、ボーイ達も立食しに歩いていく。
「それじゃあ、僕達も行きますか。お酒は軽めのもので?」
さりげなく、腰に回してエスコートする昴君に腹が立つけど、気にしないふりしておく。
「そうだなあ、後で飲み直したいから今は軽めで。何か、食べたいものは?」
「飲み直すなら、食事も軽めにしておきます。
では、お酒を貰ってくるので、少し待っていてください。」
「了解、ナンパされないようにね」
少し、からかいの意味を含めて注意しといたら昴君も、
人の事は言えませんよ。とか言いやがった。
それから、壁の花として少し待ってたら若い男性がこっちに歩いてきた。
「おひとりですか?」
「いえ、待っている人が居て・・」
「こんなに、綺麗な人を待たせるなんて勿体ない。」

「そんな事ありませんよ。それにこういうパーティーは少し苦手で・・」
「そうでしたか。今夜は怪盗キッドが出ると予告に入っていましたね。」
「そうですねえ、・・・・それで、あたしに何の用かしら？怪盗さん？」
「何の事で「しらきってどうすんの、あのボーイと一緒の所を見て、同行者か近しい者かと思って近づいたんじゃないの？丁度、今一人だしね。」・・・・鋭い頭脳のお持ちの方だ」
「それで、あたしのパートナーに真似ようかと思ったけど、上手く避けられたかしら？」
「そこまで、見破られるとは。流石、あの名探偵のお連れですね。
貴女の様な人に出会えた礼に、こちらをどうぞ」
生の怪盗キッド、アニメで見るより気障過ぎて秀君と同等かもしれない・・・。
侮れない・・・、って思ってたら、一本の赤い薔薇が出た。
「別れの時間が近づいてきたようです・・・。
貴女とはまた何処かで出逢える気がします。その時はお名前を聞いても？」
「そうね、『怪盗キッド』じゃない貴方に出会えたらね。考えておくわ」
「!!!光栄ですね、それでは。」
ドレスの緋色にも負けない、真っ赤な薔薇。
それを、瞬時に抜き取られて、顔を見上げると昴君が居た。
「ふと目を離した隙に声をかけられるとは、本当に妬けますね。
そして、いつまでその赤い薔薇を見ているおつもりで？」
「・・・・・」
「なんです？」
「いや、秀君も妬くんだなーって」
「・・・俺をなんだと思ってるんだ」
「いや、別にサイボーグとか思ってないから安心して。」
「思ってたのか・・・」
なんて茶番が続いたのは言うまでもない。

それぞれの想い

さてさて、やってきました！
今日は待ちに待ったシャロンちゃんとのお買いものです!!
ふはははは、此処までくれば怖いものなしに近いです。
・・・・気を取り直して。
秀君とボーイはちょっとは警戒心を持てよとの事でなにやら物騒な物をあたしに押し付けて来たけど、まぁ置いてきたけど。
妥協してこの前秀君がくれたＧＰＳ付きのピアスだけ付けてきたけど。
今頃、ボーイと一緒に食いつくようにパソコンとにらめっこしてる姿が目に浮かぶ。
「お待たせ、麗。」
「はぁい、シャロン。それとも今はベルモットかしら？」
そう、今あたしの目の前にはシャロンとバーボンこと公安の降谷零の姿が居た。
彼は、あたしの姿を見たと同時に目を見開いた後想像以上の警戒を出してきた。
・・・・すました顔でにこにこ笑ってるけど、バレバレよ。
「やめて頂戴。確かに今回は二人じゃないのは申し訳ないけど。
彼が、言う事聞かないのよ。」
「始めまして、僕は安室透と言います。
すいません、無理を言って付いてきてしまって・・今日は荷物持ちでも何でもしますよ」
「初めまして、麗よ。そうね、それじゃ、遠慮なく。」
あえて、本名は名乗らないでおく。
後で、風見さんに連絡しとこ・・・。
それから、複雑な気持ちでショッピングモールで買い物したり雑貨をみたり
既にお荷物持ちの零君は空気化してるけど仕方がない。
一日はあっという間に過ぎてもう夕方近いそろそろ、時間だ。

「今日も楽しかったよ、シャロン」
「あたしもよ、麗。また会いましょう今度はあたしとインペリアルでもどうかしら？」
「それは、良いわね。それじゃ、次合う日まで」
お互い、次の約束をして背を向ける。
「インペリアル・フィズ」意味は楽しく会話かぁ。
確かに、今日は会話は出来なかったなぁ。
ベルモットもあたしも気付いていたけど、あたしの服の襟に丁度隠れるように仕込まれた
盗聴器。それを仕込んだのは勿論零君だけど。
そっと、襟から盗聴器を抜き取って
「Ａ　Ｓｅｃｒｅｔ　ｍａｋｅｓ　ａ　ｗｏｍａｎ　ｗｏｍａｎ」
小さくけど確かに聞えるように呟くと、地面に落しヒールで潰しそれをハンカチで覆い適当なごみ捨てに置いてきた。
・・・・・・・・・・・・
麗と別れてバーボンの車に乗ったと同時に彼が口を開いた。
「彼女と貴女はどういった関係で？」
「あら、そんな事あたしが教えるとでも？」
「まさか、そうやすやすと口を割ってくれるなんて思ってもいませんよ」
「それ相応の対価でもあるというの？」
「いや、ただ僕の興味本位ですよ。」
「そう、残念ね教えられないわ。言っておくけど麗の名前をジンの前で出したら」
ベルモットは、懐からＳＷ　Ｍ３６を取り出しバーボンのこめかみに当てる。
「こうなるかもしれないわよ。ジンが貴方にね」
「ジンが？何故、そこでジンが出てくるんです」
「貴方も知ってるでしょう。組織の噂で、あのジンがシェリーの次に執着を持った女の事」
そこまで、言って区切ると流石に分かったのか、目を見開く。

「まさか、あの噂が彼女だとでも言うんですか!?」
「声が大きいわよ。そう、彼女よ。でもこれは暗黙の了解。
　貴方も知ってるでしょう。彼女の名前を男は勿論、女のあたしでもジンの前では喋ってはいけない。喋ったら最期脳天ぶち抜かれて終わりよ。」
「・・・彼女も恐ろしい男に捕まったものですね」
「そうね、でもジンだけじゃないわよ。」
「それは・・・・」
「さ、この話はもうお終いよ、車を出して頂戴」
　車内に僅かに流れたベルモットの殺気にバーボンは早急に車を出した。
「(一応調べておくか・・・。)」
「(シルバーブレッドにエンジェル・・・。そしてあたしの・・・)」
　その頃、車内でターゲットを待ち構えている黒ずくめの二人の男が居た。
　1人は、サングラスをかけた男、ウォッカ。
　そして、もう一人長い銀髪に口には煙草をくわえ、目を閉じている男、ジン。
『ジン、そろそろお別れかしら?』
　目を閉じれば、殺したあの女の声が今でも聞える。
「アニキ、ターゲット確認しましたぜ」
「分かった、行くぞ」
　今まで殺した女も男も記憶にはない。
　だが、あの女だけは違う。
　目の前でそして自分の手で殺したはずなのに、鮮明に覚えている。
「案外、まだ生きてるかもしれねぇな・・・。」
　もし、本当生きていたとしたら次も必ず俺の手で終わらせてやる。
「(お前を殺すのは、俺だけだ)」
「なんか言いましたか?アニキ」
「なんでもねぇ、行くぞ」
　二人の再会は、近からずとも遠からず。

「うえっくしゅ!!!」
「麗さん、風邪？」
「まさか、誰かに噂されてんのかな」
「最近風邪が流行ってるからな、気を付けろよ」
「はいはい。」

ミステリートレイン

古雅麗華。ただ今死亡フラグが立っております。
というのも、あれだよ。ミステリートレインだよ・・・。
鈴木財閥が誇る最新鋭の豪華列車「ベルツリー急行」
あれだよ、バーボンとベルモットがシェリーちゃんを暗殺する計画。
東京駅から発車して、行き先不明の列車でそれまで推理クイズを楽しむ。
けれど、まあそこは、知っての通り。本物の殺人事件が起きるわけで・・・。
あたしは、軽く変装し古雅麗華とは離れた人物になって急行に乗り込んだ。
園子ちゃん達にも誘われたんだけど、まぁ流石にね？適当な理由で断りましたよ。
秀君と有希子と二手に分かれ、組織を欺く。
シェリーちゃんには申し訳ないけど、この事は内密で。
「ちょっと、蘭！あの人イケメンじゃない?!」
相変わらず、園子ちゃんはミーハーね・・・。
でも、あたしもこれは自信持って堂々と歩けると思う・・。
だって、あたしと有希子の好みがぎっしり詰まった男装だもの・・。
声は、まああれだよ。秘密ってことで。
ふふん、男装癖付きそうでちょっと怖い。
車掌は八号車の乗客者達に挨拶を始めていた。
Ｃ室は安東諭。
Ａ室は能登泰策。
Ｅ室は出波麻利。
Ｄ室は車いすの小蓑夏江と住友昼花。
Ｂ室は毛利小五郎。
ちなみに、あたしは五号車のＡ室。
Ｂ室は、秀君と有希子達だ。

それに、今回はベルモットからの情報網じゃないからベルモットもこの件については知らないはず。
それは、今回ベルモットが単独行動ではないからだ。
終着点のはずの名古屋にはジンとウォッカがベルモットと連絡をしている筈だし
それに、バーボンが目を光らせているし・・・。
無闇に行動してベルモットに余計な疑いをかけるのはまずいだろうし。
バーボンはまだ、あたし達の存在の詳細は恐らく分かっていない。
彼の公安の部下に調べるよう言っているけど、それよりも早くあたしが手を回しているから、充分な情報は持っていないからだ。
けれど、もうそろそろじゃなかったっけ・・・。
風見さんから連絡入りそうだなぁ。
『ばれました』って・・・。
まぁ、良いけど・・。
取り敢えず、目の前の問題から片付けて行きますか・・・。
八号車の車掌が乗客たちに挨拶をしていき、ベルツリー急行がゆっくりと発車していった。
・・そう言えば、ベルツリー急行の一等車で今度怪盗キッドがなんかするんだっけ。
もしかしたら、今下見に来てたりするんじゃなかったっけ。
「それじゃあ、よろしく頼むよ。今回の事はベルモットには言ってないからね。
くれぐれも気を付けてよ。あたしは、あたしで別行動を取るから」
「麗こそ、気を付けてよ!」
「はいはい。それじゃあ、秀君も気を付けて」
「分かった。」
それから、別行動に移りあたしは、7号車と8号車にこっそりと盗聴器を置き、場の全体を把握する。
そこから始まる、推理クイズ。
そして、本当に殺された密室殺人事件。

着々とボーイと真純ちゃんが推理を解くために動いている中、真純ちゃんが取ったムービーを子供達に見せていくため、1人廊下を歩いていた時だった。
赤井秀一の変装をしたベルモットと有希子がすれ違った。
「誰だ、お前」
それに応えないベルモットに真純ちゃんが焦った声を出す。
「誰だって聞いてんだよ!」
「ふっ、相変わらずだなぁ、真純」
ベルモットの言葉と共に、
「秀兄・・・秀兄・・本当に秀兄なのか?でもなんで、秀兄は死んだって?!・・・」
混乱している真純ちゃんにベルモットは、スタンガンを素早く真純ちゃんの身体に落し、
気絶させた。
そんな中、もう一つの盗聴器の方にボーイは毛利小五郎で推理をしていた。
そして、B室にはボーイと毛利小五郎と哀ちゃん以外は全員居た。
「ええ?哀君がいないじゃと?」
博士が少し、焦った様子で探しに行っていた蘭ちゃんは
「うん、近くの車両のトイレも探したんだけど・・・」
そこで、蘭ちゃんの携帯が鳴る。
「あっ、哀ちゃんからのメール。
『私は大丈夫だから心配しないで』だって・・・」
哀ちゃんは、もう移動したか・・・。
となると、後は八号室。
そろそろ、推理ショーも終盤にかけてるだろうし、有希子もベルモットと対峙してるかもしれない。
さあ、ここからが勝負どころかな。
その頃6号車E室は、読み通り有希子とベルモットが対峙していた。
ベルモットの考えは、メールでシェリーをおびき出し、自分が殺さ

れる時にあの子供達を巻き込まないため、解毒薬を飲み大人の姿になって現れるだろうと。
　最も、有希子が大人のシェリーに変装し組織達を欺こうと考えていたことはベルモットには見透かされていた。
「手を引きなさい、有希子」
「それこそ、無理なお願いよ。シャロン」
　毅然とした有希子に少し怪しむベルモットだが、ただの意地だろうと解釈した。
　それから、有希子のスマホにボーイからの電話が入り、それをベルモットが取り有希子の声真似をし応答する。
　そして、次に組織からのメールが来たと同時に、八号室から放火だと連絡が入った。
　その後、哀ちゃんが居る車両に行き、保護をする。
「だれ・・・・!」
「安心してよ、って今はこの姿だから説得力無いか・・・。」
「もしかして、・・・」
「流石に此処で名前を呼ばれたらたまったもんじゃないからね。察してくれて助かるよ。
　そうだな、今は蓮（れん）と呼んでくれるかな・・」
「分かったわ」
「よし、それじゃあ、皆の所に行こうか。心配してるだろうし。
　後は、大人達に任せておきなさい。まだ君は子供なんだから自分の手に余る問題は俺達に甘えておけばいい。」
「そう言うわけにはいかないのよ・・・げほっげほっ」
「あ～、言わんこっちゃない。今の君もあの姿の君もどっちも子供だ。
　さぁ、後はもう寝なさい。君が心配する様な事は何一つ起こさせないさ」
　その言葉に安心したのか、哀ちゃんは腕の中で寝息が聞こえた。
「すいません、この子の保護者は居ませんか?」
「おお、哀君!!」
「哀さん、どうしたんですか?!」

「どうやら、風邪がまだ治りきっていない様ですね。
僕がたまたま、廊下を歩いていたら、この子を見つけたもので・・」
「そうじゃったのか！いやあ、すまんのう。ありがとう」
「いえ、それじゃあ、僕はこれで失礼します。」
博士の後ろで蘭ちゃんと園子ちゃんが騒いでる中、真純ちゃんは真剣そうな顔でただひたすらじっと考え込んでいた。
恐らく、秀君事だろうけど。
それから、7号車付近に近づくとバーボンが居た。
既に、八号車とは離れていたらしく八号車は止まり爆破していた。
多分、バーボンに手榴弾を投げた秀君を目撃したんだろう。
確認の取れた赤井秀一の死をもう一度彼は洗うだろうなあ。
そして、今度こそ確信するはずだ。
その時は勿論こっちも改めて御挨拶させてもらうけど。
「あれは・・・赤井・・!?」

ようやく、名古屋に着き降車した。
前にはボーイ達が、右は有希子が反対側はベルモットとバーボンが合流している。
そして、後ろには変装を終えた沖矢昴の姿があった。
「取り敢えず、当分は列車はいいかな・・・」

腹の探り合い

そろそろ、クリスマスという大イベント。
あたしは、買い物をしに行こうと家を出てショッピングモールへと向かった。
秀君は、家で掃除中だ。
・・・クリスマス、ねぇ。
なんか、起こりそうだなぁ、聖なる日でも・・。
ふと、目の前の電柱を見ると風で飛ばされたと思われるレシートがあった。
それでもなんとなく、気になってレシートを拾って開くとそこには
「ＣＯＲＰＳＥ・・・死体・・・。」
「すいません、そのレシート。少し見せてもらっても・・・」
はい、バーボンでした。
「貴女は・・・。」
「あら、安室さんでしたっけ?このレシートがどうかしたんですか?」
「少し、気がかりな事がありまして。
見てください、このレシートの示されている『ＣＯＲＰＳＥ』
ただの印刷ミスかと思われるかもしれませんが、その下にも幾つか消されたと思われる所があります。僕が、バイトをしているポアロという店に大尉という猫が来るんですよ。そしてその猫の首輪に挟まっていたらしいんですよ。その首輪が冷たかったとなると、冷凍車。
ですが、冷凍車の車のナンバーは８から始まる８ナンバー。この死体という文字の下の数字には当てはまらない、と言う事は恐らく・・」
「宅配業者のクール便ということになるわね。
それで?そのメッセージを送りそうな人物は・・・。」
「その大尉が最近ポアロに来ている事を知っているのは梓さんと僕とコナン君。
コナン君は、ポアロの上の毛利探偵の所にいる子供でして・・・。」
「知ってるわ、あたしもあのボーイとは顔見知りだもの。

可能性としてはあり得るかもしれないわね。
・・・・安室さん車、あるかしら？次に、クール便が行く所が思い当たるのよ。」
「分かりました。」
・・・・これあれじゃん、甘くなんちゃら宅配便。
まさかの、安室さんとタッグ組むなんて思ってもみなかったけど・・・。
それでも、確か哀ちゃんと光彦君が危ないんじゃなかったっけ。
上着脱いでおこ。
その後、工藤邸に逆戻りしていった。
「所で、貴女はベルモットとはどんな関係で？」
「あら、随分ストレートね。この前のメッセージ聞いてくれなかったのかしら？」
「ああ、それでも気になりましてね。僕探偵業をやっているんですよ。
その性分からか、気になった事は自分が納得しないとつい・・」
「そう、それじゃ教えてあげるわ。彼女とは、ただの友人関係にしか過ぎないわ。
『ベルモット』の名前を知っているのは、貴方も知ってるんじゃない？」
組織の噂に流れているようにね。
そう、口に出すと安室君は悔しそうに口を歪める。
「貴方も気を付けなさいな。あたしは知ってるわよ」
何かとは言わないけれど。
「それ以上言われてしまうと僕も困りますね。これ以上の詮索は辞めておきましょう。」
お互いの為にも、ね。
そうこうしているうちに、工藤邸に着きそして目の前のクール便が止まっていた。
「すいません、この路地狭いから譲ってもらえませんか？
傷付けたくないので・・」
「ああ、すいません・・」

「ポアロの兄ちゃん!!助けてくれよ!!」
「あれ?君達、何をやっているんだい?こんな所で」
「おい、この餓鬼どもの知り合いか?」
「ええ、そうですけど?」
「なら、生かしちゃおけ・・がはっ」
　おお、良いパンチ。
「言ったでしょう?傷付けたくないからと譲ってくれと」
「ひいいい!」
　なんとか、犯人を捕まえた所で車から降り子供達の方へ向かった。
「麗お姉さん!」
「はぁい、ボーイ。また、面倒な事に巻き込まれたわね」
「ははは、でもなんで安室さんと」
「あたしが、レシートを拾ったのよ。そこから、彼と一緒に、ね」
「そっか。」
「それじゃ、僕はこれで失礼しますよ。」
「ありがとう、安室さん。助かったわ」
「いえ、それでは」
　安室さんと別れて、子供達に囲まれた。
「お姉さん、コナン君の知り合い?」
「うん、麗華だよ。ボーイとはね少し前から知り合いで。
　この工藤邸に少し前から、居候させてもらってる時からだよ」
「でも、確か昴お兄さんも・・」
「そ、彼と恋人でね。あの前に昴が住んでいた所に越してくるはずだったんだけど、
　火事で焼けたって聞いてね、そこで工藤邸に一緒にお世話になってるんだよ。
　偶然にも、工藤邸の家主とその息子とは知り合いでね。」
「そうだったんだぁ!そうだ、お姉さんもこれから一緒にケーキを食べない?」
「いや、これから買い物に出掛るから。皆で楽しんで。
　それと、哀ちゃん。これをくるんでおきなさいさ」

「ありがとう・・・」
「それじゃ、またね」
「ばいばーい！」
はぁ、結局何も買えなかった・・・。